

## 在日米軍司令官兼第5空軍司令官シュナイダー中将講演

(JAAGA 主催講演会にて 13.5.2019)

日本の元号が「令和」に改元されて初めてのJAAGA主催講演会は、在日米軍司令官兼第5空軍司令官シュナイダー中将 (LTG. Kevin B. Schneider) が「Stronger Together - Postured for a New Era (共により強く - 新時代への姿勢)」の表題で実施されました。初めに、司会の平本理事から、シュナイダー中将は、指揮官としてF-16部隊飛行隊長、航空団司令官、南西アジア地域での遠征航空団司令官を歴任し、幕僚としては統合参謀本部、米空軍参謀本部、米空軍中央軍司令部、インド・太平洋軍司令部での勤務経験があり、本年2月に現配置に就かれたこと、3,800時間以上の飛行時間を有する最上級操縦士であること、枢要な地位での勤務経験からアジア太平洋地域の戦略環境に精通していることなどが紹介されました。

シュナイダー中将は、講演の冒頭、第33代航空幕僚長の齊藤元空将のJAAGA会長就任への祝意と前会長岩崎元空将への謝意を表され、JAAGA総会で日米関係について講演できることが大変光栄で感謝している旨、日本語を交えて述べられました。そして、米国は良きパートナー国である日本と肩を並べて立ち、新天皇の即位と「令和」時代の幕開けを祝し、新時代に向かう新たな機会や挑戦に対応できる体制を作っていくと述べられました。

その後続く内容は①インド・太平洋地域内における安全保障上の脅威について②米第5空軍隊員が航空自衛隊員と共に日本の防衛の為に共同で、航空、宇宙、サイバー等の分野において、各機能や相互運用性の向上にどのように努力しているかについて③日本国内の米軍人は、国の要請があれば、日本防衛の為に命を捨てる覚悟であることの3つの点についてでした。

最後に、今後の脅威に備えて、米空軍と航空自衛隊の即応と共同が最高度に発揮できる様、引き続き意見交換して行く旨と過去の日米同盟へ貢献してきた人々への感謝の意が述べられ、講演を終えられました。

講演の概要については、以下の通りです。

「Stronger Together - Postured for a New Era (共により強く - 新時代への姿勢)」

講師 在日米軍司令官兼第5空軍司令官 中将 ケビン B シュナイダー  
( LTG. Kevin B. Schneider )

本日、2019 JAAGA 総会にて講演させていただくことは、私にとって光栄なことです。平成の時代が終わり、令和時代の幕開けというとても幸先の良い時期です。米国は、良きパートナー国である日本と肩を並べて立ち、新天皇の即位を祝福し、新時代へ向けた新たな

な機会と挑戦に対応できる体制を作ってまいります。

今回で3度目の赴任となった日本は、私の心や思い出の中にも特に思い出のある場所であり、在住できることをとても嬉しく思っています。父は海軍将校で横須賀に勤務していたので、私が空軍将校として再度日本の土を踏み、本物の飛行機を操縦するとは私自身も想像できませんでした。F-16の最先端戦術部隊と評価されていた三沢に赴任した若い頃、航空自衛隊との親密な関係の恩恵を受け、私は北日本の良好な訓練環境でトレーニングすることができました。

日米両国を取り巻く安全保障環境は急変し、多くの大きな課題に直面しています。中国、北朝鮮、ロシアは、長年に亘って地域の平和と安定の恩恵を受けてきましたが、この平和と安定をひっくり返す可能性を秘めた国々です。これが日米同盟がこれまで以上に重要である明らかな理由です。そして今、私が必要としているのが即応性に関わる皆様の支援活動です。この地域の脅威は非常に早い速度で進化しており、我々の部隊は常に最大機能が発揮できる状態を維持して脅威を抑制し、あるいは戦い、勝つ必要があります。米国家防衛戦略(NDS)を読むと大国間の競争に勝つには長期に渡る能力維持の必要性を感じます。NDS及び日本の防衛計画の大綱(NDPG)は、共に地球規模の安全保障はより複雑化し、国際社会の勢力均衡の変化を認識しています。中国とロシアは国際秩序に公然と異議を唱え、戦略的競争を再出現させたことは新たな特徴と言えます。この地域の平和と安全を脅かす明確な脅威の為に米空軍と航空自衛隊は常に最高レベルの即応可能態勢を維持し、危機のみならず複雑な様相の戦いにも勝つ必要があります。我々は、自由で開かれたインド・太平洋地域であるために米国の軍事的優位を更に強めて、太平洋空軍及びインド・太平洋軍をサポートすることに力を集中します。我々は継続して改革と実験、マルチドメイン指揮統制、戦域兵站や状況に応じた権限配分等を太平洋空軍と調整します。この努力は必ず報われると思っています。

結果的に、我々の万全の用意は抑止力を育みます。戦争を起こさない確実な手段は、必ず勝利するための十分な事前準備をすることです。第5空軍は彼らに危機的意識を醸成させつつ、インド・太平洋地域内の複雑な脅威環境に対応する為の訓練を行っています。

「VIGILANT SHOGUN(用心深い将軍)」演習や「RESILIENT TYPHOON(立ち直る台風)」演習は、我々の部隊がどのような環境下でも戦域内を円滑に移動し、奪取し、維持し、自主的な行動を確実にできる為のものです。

我々が行う訓練と作戦は、我々の致命性(致死率)と即応性に直結します。即応性が不十分だと日本と日本国民の防衛、地域の平和と安全維持という我々の任務が達成できません。しかし、それらよりも断然に国際安全保障の大黒柱は、日米同盟関係とパートナーシップ・ネットワークです。過去70年以上、日米同盟はインド・太平洋地域の安定と安全、経済的繁栄の土台であり、共有利益、共有価値観、安全保障の責務の上に成り立っています。また、この同盟関係は、透明性のある政府と透明性のある経済取引、市場や全ドメインへのアクセス、及び国の主権の尊重と保護という価値観を分かち合える人々の目印であ

るとも言えます。そして今現在、日米同盟は最強です。日々、難易度が増し続けている安全保障問題に直面するにあたり、必要不可欠な同盟です。

日米同盟の強さは、米国の **NDS** と日本の **NDPG** を見れば一目瞭然で、どちらも足並みがそろっているということです。日米両国は、①限定的な小規模緊急事態から高レベルの軍事衝突事態まで柔軟性をもって対応させる必要性を共通認識②新しいドメイン（宇宙、サイバー、電磁スペクトラム等）を組み合わせ、マルチドメインオペレーションに適応する必要性について考えが一致③増加している非伝統的ドメインへの脅威に対して、既存の国家安全保障のパラダイムを変えるという構えで認識が一致しています。

日本を取り巻く脅威は急速に成長していますが、我々のリーダーや空軍兵は単なる受動的観察者ではありません。過去4年間の隊員同士の心の絆や統合化（人種融合）は急速に高まりました。統合化の成果は、人道支援／災害救助活動への支援能力と手強い敵と戦って勝利できる能力を強化できました。米国は最先端能力機能を日本に配備しており、同盟の重要性の表れであると同時に共に実戦さながらの訓練を行なえる機会を提供しています。多国間演習等（**KEEN EDGE**、**KEEN SWORD**、**COPE NORTH** 等）を通じて隊員たちは結びつきをより一層強めています。もし要請があれば、我々は如何なる敵対者とも戦い、勝利する準備はできています。インド・太平洋地域は、歴史的に見ても最も被害の大きい自然災害が多発する地域です。昨年、インドネシアの **M7.5** の地震の際には、日米 **C-130** 輸送機は、兵站や **USAID** 支援物資展開も協力することができました。

残念なことに、ここ数ヶ月の間に米国及び航空自衛隊共に航空事故により隊員を失いました。この様な出来事は、家族、部隊、即応性に多大な影響を与えますが、同時に危機の際には迅速に対応し、支援するという意欲と能力を際立たせます。私は、我々の友情の重要性と作戦調整能力についての考えが更になりました。

現在実行中の多数の演習、実作戦、危機対応に加えて、我々の部隊は **SME**（専門家）を継続的に指導して、この地域における危機の能力やコンセプトや脅威について共通の理解を深めていきます。昨年、第5空軍は、初の二国間における緊急事態対応意見交換会を開催しました。日米から約50名の専門家が参集し、相互運用性の向上人道支援・災害対応を迅速に遂行する能力向上の為に意見交換をしました。我々は、これからもパートナーとして「**COPE NORTH**」で航空自衛隊の緊急対応部隊発足に向けて支援し相互運用可能な能力を開発していきます。毎年、米第5空軍と航空総隊は、**FETAT**（**Far East Tactics and Analysis Team** 極東戦術分析チーム）二か国間ワーキンググループを継続して開催していきます。日米両国の軍事情報分析官と現場のオペレーターと一緒に集まり、日米両国の戦術作成に不可欠な敵戦術を分析します。今日の相互運用性と良好な関係は、全ての演習、実動、交流を通じて築かれました。数々の改善を実施しましたが、まだまだできることは沢山ありますし、すべきです。

将来を見てみると、統合航空運用、知識共有、軍事情報共有、宇宙、サイバー、兵站、施設・工兵等の能力を更に高め、強化する機会があることに興奮を覚えます。太平洋空軍

は、積極的に F-35 戦闘機をハイエンドの戦いに備える為に、積極的に訓練や演習に取り入れています。競争相手に対し成功を収めるには、航空機の機能、種類、機数をただ増やすだけではなく、戦い方そのものを変えていく必要があります。ACE (Agile Combat Employment 迅速機敏な戦力展開) の概念に磨きをかけていく中で、お互いの部隊が素早く、軽快に動けるために我々は TTP (Tactics、Techniques、Procedures) の造成段階で収集した教訓を航空自衛隊と共有します。今月末、米第 5 空軍は、ISR (Intelligence Surveillance and Reconnaissance) シンポジウムを横田基地で開催します。このシンポジウムは、戦域 ISR の利害関係者に現在及び将来の機能に関する共通認識を図るのが目的です。米空海軍、空海自のメンバーが参加し ISR の相互運用性に対する包括的、統合的なアプローチを確かなものにするのが狙いです。米第 5 空軍と航空自衛隊は、これまでに学んだ教訓を日米双方の AOC (Air Operation Center) を通じて、ATO (Air Tasking Order) 及びダイナミックターゲティング作成に生かします。将来を見据えて、日米同盟の進化を継続させ、益々複雑化する安全保障環境の数々の課題に挑み、この地域の信頼できる同盟国やパートナー国との連携をしていきます。日米両政府は、自由で解放されたインド・太平洋地域を達成、維持すると同時に北東アジアにおける安全保障の課題に向き合うことは、日米同盟だけでは不可能であると理解しています。日本とオーストラリア間のすでに強固な関係に加え、日本はこの地域でインドなどの新たな関係構築を模索し、パートナー国との関係構築というとても重要な役割を果たしています。

1986 年以来、米軍は統合的軍事力の構築に取り組んでいます。各軍種の文化や個性を維持しながら、効果的にマルチドメインオペレーションを行ったり、統合作戦を実行させる必要があります。戦争に勝つ為の鍵は「多国籍、統合運用作戦」です。インド・太平洋地域のパートナーネットワークの将来を見据え、訓練や演習を行なう際には、地域内の友好国や他軍種を取り入れることが重要です。これからの将来、共に何を成し遂げることができるかを模索する良い機会ですし、こういった過酷な訓練の機会によって最大限のレベルに達することができるのです。現在 5 万人以上の米軍人が日本国内にいますが、我々は国の要請があれば、日本防衛の為、命を捨てる覚悟です。我々は同盟国、友人、そして、パートナーです。

この地域での安全保障上の脅威に立ち向かうのに必要な最高レベルの準備態勢を維持するには、現実的な訓練が必要です。ただ日本国内にいるということだけではダメで、常に危機と紛争に備えておく必要があります。信頼できる戦闘能力とは、準備を如何にするかに依存していますから、部隊は紛争の範囲全体を含む最も複雑なシナリオを用いた訓練、演習を行ない、競い、抑止し、そして勝利する能力を確実に保持しなければなりません。準備態勢を維持するには、戦って勝つ為の水準を高く設定し、徹底的に訓練することが必要です。私は、我々の訓練及び実動が地域社会に影響を及ぼすことを知っています。時には、準備体制維持力低下の犠牲を払いますが、我々はそれらの影響を軽減する努力をしています。我々は日本からのお礼や感謝を求めています。我々は単に我々の任務を理解

し、その任務のため、益々複雑化するこの地域での即応性を維持するには、厳格に訓練し続けることだということをご理解いただきたいと思います。我々は日本政府と密接に協力して、基地関連の問題を管理し、訓練と即応性と地域社会に関わる事項とのバランスを取る努力をしています。我々は、皆様が在日米軍の役割について、あらゆるレベルの政府関係者や地域社会への教育、変化する安全保障環境や部隊の致命性と即応性の維持等の理解を深める良き伝道者であることに感謝します。これは私のとても大きな関心事項であり、皆様の支持が必要です。我々はこれからもこの件に関しては議論を継続し、即応性の必要性を一般社会へ訴えていくつもりです。

最後に一言、今後の脅威に備え、米空軍と航空自衛隊の即応と統合が最大限に発揮されるように訓練、演習を進化させる必要性を引き続き話し合っていきたいと思います。また、今日の我々があるのは、過去の空軍兵やリーダーの存在があります。皆様の過去、現在、そして未来の日米同盟への貢献へ心よりお礼申し上げたく思います。今回のイベントの調整をしてくださった、谷井元将補及び JAAGA の皆さまに重ねて御礼申し上げたいと思います。GOSEICHO ARIGATOU GOZAIMASHITA.

#### <質疑応答>

Q 1 昨年、横田基地に配備された CV-22 オスプレイを全面的に受け入れている近隣自治体もあれば、不安に感じている人もいます。安心させるためにも、オスプレイをもっと定期的に飛行させるべきではないか？

A 1 まず、日頃からの米空軍に対するご支援に感謝いたします。米側として、部隊の配置に関しては、脅威への即応性を維持したり、日本国内のいろんな状況が複雑に絡んでいることを踏まえて対応していることをご理解いただいていると思います。これを成功裏に維持していくためには、皆様のような方々からの協力が不可欠です。これからも、そのような事が維持できるようにご協力をお願いします。また、近隣自治体の皆様、私共へのご理解とご支援ありがとうございます。しかし、皆様のご支援は、横田基地近隣だけではなく、インド・太平洋地域全体の安定と安全に寄与しているということをご理解ください。

Q 2 講演の中で、日米が共同して速やかに作戦を遂行するのは大切なことだと述べられたが、横田基地で勤務する航空自衛隊員は、空幕長から発行の承認をいただいた身分証明書では横田基地の入門ができず入門に時間がかかったり、非常呼集訓練をするにも早朝の入門ができないなどの制約がある。我等は「共に戦い共に死ぬ」という気概を持って、より密接にオペレーションをやって行くという目的に鑑みて、横田基地の入門のあり方についてご検討いただきたいが如何？

A 2 それらの件に関しては、持ち帰って検討し、入門のプロセスに関して改正すべきところは改正したいと思います。

(池田理事 記)





